

新制大学70年のあゆみ

写真パネルや資料で紹介



での少数精鋭の大学から総合大学へと変容を遂げる様子や、写真パネルや資料で紹介した。

専修大学が新制大学として設置認可されて今年で70年を迎えた。これを記念した特別展「新制専修大学の出発」が11月7日から12月7日まで、生田キャンパス9号館1階で開催された。戦後の教育改革の中で、それ

生田キャンパスで特別展



新制大学は、1947年制定の学校教育法に基づき高等教育機関。46年に校友として初めて総長となった今村力三郎(1866-1954年)の下で、新制大学移行準備が進められた。49年、生田キャンパスが新たに整備され、商経(経済学科・商業学科)、法(法律学科)の2学部3学科で認可され、新制4年制大学として歩み始めた。当時の学生数は、旧制大学生らが通う生田キャンパスが3884人、新制の学生が通う生田キャンパスが994人だった。展示は5部構成。同年10月に開催された専修大学創立70周年記念式典のポスターや記念バックルなども展示している。学生生活では、46年に女子学生の入学が認められ、男女同席のゼミナールの様子を紹介。また、当時の学生の「スクールライフ」やアルバイト事情にも焦点を当てている。特別展は専修大学創立140周年記念事業の一環として開催された特別展示



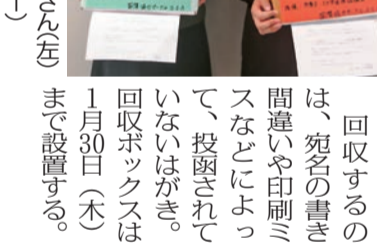
「判決を多くの命を守るにつなげてほしい」と呼び掛ける紫桃さん

大川小の問題を巡っては、震災前に作成・提出された危機管理マニュアルの存在など形式上は防災対策が取られていたが、学校側の認識が足りない点や市教委のチェックの不足から機能しなかったことが裁判で指摘された。

海外の恵まれない子どもたちを支援しようと、国際交流サークルS・I・A(S・I・A)は、書き損じはがきの回収を行っている。生田キャンパス10号館と川崎市多摩区役所に回収ボックスを設置し、協力を呼び掛けている。S・I・Aでは2008年から書き損じはがきの回収に取り組みしており、区と多摩区・3大学連携協議会の協力のもと、昨年は約1400枚集めた。回収したはがきは、途上国支援を行っているNPO法人ハンガリー・フリー・ワールドを通じて途上国に寄付する。

大阪府立大学の高橋眞教授(民法)は判決について、「児童の安全確保のために、事前防災への責任を学校や市教委などの組織に求めた。事故を現実防ぐために、組織的過失を招かないよう、誰が何をすべきなのか、そこを問うところまで踏み込んだ点が画期的だ」と他の災害事故裁判の安全配慮義務を例に分析した。シンポジウムには原告の遺族2人や遺族側の弁護士らが登壇した。5年生の次女を亡くした紫桃隆洋さんは「裁判で勝訴しても子どもたちが生きていけるように、どうか生きていくべきか考えていきたい」と語った。本学での大川小を巡る集会は、仙台高裁での控訴審判決直後の昨年5月にも開催され、今回は2回目となる。

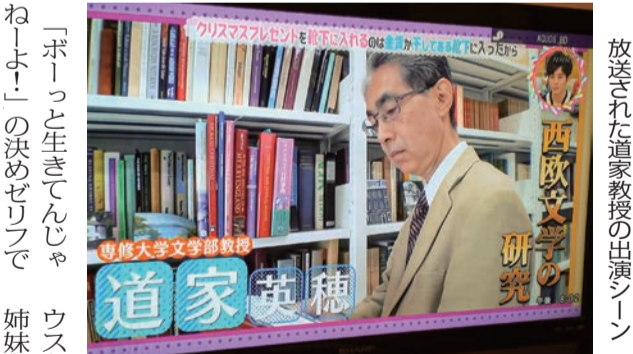
書き損じはがき回収 S・I・Aが呼び掛け



回収ボックスを手にする渡辺さん(左)と神山瑛理さん(ネット情報)

当している渡辺佳音さん(人間科学)は「日本にいながら途上国の人を助けることができるので、ぜひ多くの人に参加してもらいたい」と呼び掛ける。回収するのは、宛名の書き間違いや印刷ミスなどによって、投函されていないはがき。回収ボックスは1月30日(木)まで設置する。

『チコちゃんに叱られる』に出演 文学部・道家教授



放送された道家教授の出演シーン。おなじみのNHKの人気番組『チコちゃんに叱られる』に、道家英穂文学部教授が出演した。「クリスマスプレゼントを靴下に入れるのはなぜ？」の疑問に答えた。放送は11月29日。道家教授によると、舞台は4世紀、小アジアの古代都市ミユラ(現在のトルコ)。聖ニコラウスという司教が貧しい三姉妹を救うため、その家の窓から金貨を投げ入れたところ、金貨が暖炉の前にかかっていた靴下の中に入った。このエピソードからサンタクロースが靴下にプレゼントを入れるようになったという。道家教授の専門は、英国の詩、西欧文学の思想的研究。道家教授は「靴下は当時、貯金箱のように使われていたので、投げ入れた金貨が偶然入ったというのは、伝承の過程でそういう形になったのかもしれない」と話している。

「ボーっと生きてんじゃねーよ」の決めゼリフでウスという司教が貧しい三姉妹を救うため、その家の

判決の意義問う 神田でシンポジウム

東日本大震災で児童ら184人が犠牲になった宮城の事前の防災対策不備を認めた遺族側勝訴の判決が10月、最高裁で確定した。この判決の意義を問うシンポジウムが11月23日、神田キャンパスで開催された。市民、学生ら約120人が参加し熱心に聴講した。シンポジウムは本学法学研究所、法社会学ゼミナール、大川小学校児童津波被害国賠訴訟を支援する会が中心となって行われた。

大川小の問題を巡っては、震災前に作成・提出された危機管理マニュアルの存在など形式上は防災対策が取られていたが、学校側の認識が足りない点や市教委のチェックの不足から機能しなかったことが裁判で指摘された。



丸山教授(左)が参加したコーパス日本語学ワークショップ

丸山教授は、言語学の研究にとつてなぜコーパス(大規模な言語データベース)が必要かを説明した。後、日本におけるコーパス構築の歴史と現状を講義し、さらにインターネット上で利用できる複数の日本語コーパスの検索方法と、集計・分析の方法について演習を行った。参加者はコンピュータを使いながら日本語コーパスの検索と集計のテクニックをグループワークで学び、その結果を発表した。チェコにおける言語研究は水準が高く、1920年代に端を発する「プラハ学派」による言語研究は、現在も続けられている。日本語を学ぶチェコの学生たちとのレベルの高さに驚いたという丸山教授は、「今後もチェコとの交流を進めたい」と話す。

チエコで「コーパス日本語学ワークショップ」

チエコ共和国のプラハ・カレル大学で、ワークショップ「コーパス日本語学」が行った。チエコで日本語を専攻できる学科を持つ大学は、Prague Japanese Linguistics Instituteが大学など3大学。今回のワークショップは、これら3大学で日本語を教える丸山教授が講師を務める。丸山教授は、言語学の研究にとつてなぜコーパス(大規模な言語データベース)が必要かを説明した。後、日本におけるコーパス構築の歴史と現状を講義し、さらにインターネット上で利用できる複数の日本語コーパスの検索方法と、集計・分析の方法について演習を行った。参加者はコンピュータを使いながら日本語コーパスの検索と集計のテクニックをグループワークで学び、その結果を発表した。

丸山教授は、言語学の研究にとつてなぜコーパス(大規模な言語データベース)が必要かを説明した。後、日本におけるコーパス構築の歴史と現状を講義し、さらにインターネット上で利用できる複数の日本語コーパスの検索方法と、集計・分析の方法について演習を行った。参加者はコンピュータを使いながら日本語コーパスの検索と集計のテクニックをグループワークで学び、その結果を発表した。